

## 「神を受け入れる」

マルコの福音書 9:30～37

### はじめに

もう何度も何度もお伝えしていることですが、聖書の記述にはすべて意味があります。一つとして必要のないもの、無駄なもの、軽視して良いものなどありません。一見何の変哲もないただの状況説明、情景描写のように見える記述にも、神のご計画を指し示す重要な意図「型」が隠されているのです。記された人名、地名、数に至るまですべてに必ず何かの意味があります。聖書の記述はもちろんのこと、神が創造されたこの天地宇宙に偶然、たまたまそうなったというようなもの、出来事はただの一つとしてありません。そもそも「偶然」とは神の存在を否定、あるいはその御力が及ばない領域があることを意味する言葉です。すべては神の御心、御手の中にあつて必然、そして最善なのです。今日もそのいくつかを分かち合いたいと思います。

### 1. ガリラヤを通過して

【新改訳 2017】 マルコの福音書

9:30 さて、一行はそこを去り、ガリラヤを通過して行った。イエスは、人に知られたいと思われた。

9:31 それは、イエスが弟子たちに教えて「人の子は人々の手に引き渡され、殺される。しかし、殺されて三日後によみがえる」と言っておられたからである。

9:32 しかし、弟子たちにはこのことばが理解できなかった。また、イエスに尋ねるのを恐れていた。

前回の箇所、群衆の中にいた汚れた霊に取りつかれた人を癒されたイエシュアは、弟子たちを連れてその場から立ち去られます。その理由は「人に知られたいと思われた」からでした。この「知られたい」こととは「人の子は人々の手に引き渡され、殺される。しかし、殺されて三日後によみがえる」という事実、すなわちイエシュアの十字架の死と復活の出来事であったと考えられます。ではなぜ「ガリラヤを通過して行った」のでしょうか。イエシュアのこの歩みには大きな意味があると考えられます。なぜならこのガリラヤは昔からユダヤ人たちにとって異邦人の地と呼ばれていましたが、そこにこのような預言が記されているからです。

イザヤ書【新改訳 2017】

9:1 しかし、苦しみがあったところに闇がなくなる。先にはゼブルンの地とナフタリの地は辱めを受けたが、後には海沿いの道、ヨルダンの川向こう、異邦の民のガリラヤは栄誉を受ける。

9:2 闇の中を歩んでいた民は大きな光を見る。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が輝く。

9:3 あなたはその国民を増やし、その喜びを増し加えられる。彼らは、刈り入れ時に喜ぶように、分捕り物を分けるときに楽しむように、あなたの御前で喜ぶ。

今日私たち異邦人の教会に与えられている、イエシュアの十字架の死と復活、この事実を信じ受け入れる者は救われるというこの福音は、初めにイスラエルの民、ユダヤ人には知らされることも、そして理解さ

れることもなくこのガリラヤに象徴される異邦人の地へと届けられました。その事実がここでのイエシュアの思いや行動には表されていると考えられます。それはイスラエルと同じように、神は私たち異邦人をもご自分の民、その群れの羊として集めてくださるというご計画です。なぜならこのガリラヤという地名には「転がす、移す」という意味のヘブル語ガーラル(גָּרַל)が隠されており、この言葉は本来このような意味として用いられたからです。

#### 創世記【新改訳 2017】

29:1 ヤコブは旅を続けて、東の人々の国へ行った。

29:2 ふと彼が見ると、野に井戸があった。ちょうどその傍らに、三つの羊の群れが伏していた。その井戸から群れに水を飲ませることになっていたからである。その井戸の口の上にある石は大きかった。

29:3 群れがみなそこに集められたら、その石を井戸の口から転がして、羊に水を飲ませ、その石を再び井戸の口の元の場所に戻すことになっていた。

これはアブラハムの子イサクの子ヤコブが、故郷のカナンを離れ「東の人々の国」に行った時の出来事です。彼はそこで一つの井戸を見つけますが、井戸には大きな石のふたがあり、それを「転がして」という箇所にも聖書で最初のガーラルが使われています。この石がガーラル、転がされることとは「東の人々の国」すなわち異邦人の羊の「群れがみなそこに集められ」ることを指し示しており、ここに今述べた異邦人に対する神のご計画の「型」が表されていると考えられます。神はイスラエルと同じように私たち異邦人をもご自分の「羊に水を飲ませ」るように、ともに集め、救いをお与えくださるのです。その事実が、神のご計画がこの「ガリラヤを通って行った」というイエシュアの行動には表されていると考えられます。

汚れた霊を追い出したように、イスラエルの民を罪と死ののろいから、すべての敵から解放してくださるメシアの存在は、旧約聖書の中にいくつも預言されており、ユダヤ人たちはその成就を信じています。しかしそれが、その御方が、自分たちが十字架につけて殺したナザレ人イエシュアであることを知りません。しかしイエシュアが「ガリラヤを通って行った」とあるように、先に異邦人の地へと渡ったイエシュアの十字架の死と復活という福音は、そこを通り抜けた後に、必ずイスラエルの民のもとに届けられることになるのです。このように、異邦人が先となりイスラエルが「後になる」という神のご計画が次の出来事に表されています。

## 2. 仕える者

【新改訳 2017】 マルコの福音書

9:33 一行はカペナウムに着いた。イエスは家に入ってから、弟子たちにお尋ねになった。「来る途中、何を論じ合っていたのですか。」

9:34 彼らは黙っていた。来る途中、だれが一番偉いか論じ合っていたからである。

9:35 イエスは腰を下ろすと、十二人を呼んで言われた。「だれでも先頭に立ちたいと思う者は、皆の後になり、皆に仕える者になりなさい。」

ここに記された出来事とイエシュアの御言葉は、私たちの道徳的な価値観における生き方や考え方に影響を与えるものとしてよく用いられています。しかしそれでは先に記されたイエシュアの言動も行動もす

べて無視することとなってしまいます。イエシュアが汚れた霊を追い出された出来事も、ガリラヤを通られたことも、弟子たちが十字架の死と復活の事実を理解できなかったことも、そしてここでの出来事もすべて繋がっているのです。ですからここでイエシュアが表そうとしておられるのは、イスラエルの民、ユダヤ人が神のご計画において「後に」なる者たちであるということだと考えられます。ここで「弟子たち」という言葉が「十二人」と言い換えられています。これにも意味があると考えられます。「十二」という数は十二部族からなるイスラエルを象徴する数だからです。つまりここでイエシュアは弟子たちをイスラエルの民の「型」としておられ、「イエスは腰を下ろすと、十二人を呼んで言われた」という記述には、やがて「神の国」においてイエシュアとイスラエルの民がともに住む姿が表されていると考えられます。なぜなら「腰を下ろす」「座る」という意味のヘブル語ヤーシャヴ(יָשָׁב)は本来、「住む、住まう」という意味の言葉だからです(創世記 4:16)。やがてイエシュアがこの地上に再臨され、「神の国」が建てられ、そこにともに住まわれる時、イスラエルの民、ユダヤ人たちは異邦人の「先頭に立ち」、文字通り「一番偉い」国民とされます。それが神の定められたご計画なのです。しかしその姿は、今日の権力者や金持ちのようなものではありません。それは「皆の後になり、皆に仕える者」とイエシュアは言っておられます。ここに使われている「仕える」という意味のシャーラト(שָׂרַט)の最初の言及にその具体的な様子が描かれています。以下の記述は「神の国」の姿を表す非常に具体的でわかりやすい「型」です。しっかりと読んでその様子を思い浮かべてください。

#### 創世記【新改訳 2017】

39:1 一方、ヨセフはエジプトへ連れて行かれた。ファラオの廷臣で侍従長のポティファルという一人のエジプト人が、ヨセフを連れ下ったイシュマエル人の手からヨセフを買い取った。

39:2 【主】がヨセフとともにおられたので、彼は成功する者となり、そのエジプト人の主人の家に住んだ。

39:3 彼の主人は、【主】が彼とともにおられ、【主】が彼のすることすべてを彼に成功させてくださるのを見た。

39:4 それでヨセフは主人の好意を得て、彼のそば近くで仕えることになった。主人は彼にその家を管理させ、自分の全財産を彼に委ねた。

39:5 主人が彼にその家と全財産を管理させたときから、【主】はヨセフのゆえに、このエジプト人の家を祝福された。それで、【主】の祝福が、家や野にある全財産の上にあった。

39:6 主人はヨセフの手に全財産を任せ、自分が食べる食物のこと以外は、何も気を使わなかった。

これはヤコブすなわちイスラエルの子ヨセフについての記述です。彼はエジプトすなわち異邦人の地に連れて行かれ、そこでシャーラト「仕える」者となりました。その結果「【主】はヨセフのゆえに、このエジプト人の家を祝福された。それで、【主】の祝福が、家や野にある全財産の上にあった。」とあります。これがイスラエルによって祝福される「神の国」の見事なまでの「ひな型」です。神はこのようにして地上のすべてを祝福しようというご計画をお持ちなのです。ここに記されたヨセフの姿こそが「神の国」における「先頭に立ち」「一番偉い」国民としてのイスラエルの姿であると考えられます。私たちが異邦人だからと言って、これに異論を唱える必要があるでしょうか。ましてやイスラエルに対して妬んだり、あるいは敵意を持つ必要があるでしょうか。彼らは神の祝福の基なのです。このイスラエル

を認め、「受け入れる」家に迎え入れることこそが、私たちが神の祝福に与る唯一の方法なのです。その事実が次に示されています。

### 3. 一人の子ども

【新改訳 2017】 マルコの福音書

9:36 それから、イエスは一人の子どもの手を取って、彼らの真ん中に立たせ、腕に抱いて彼らに言われた。

9:37 「だれでも、このような子どもたちの一人を、わたしの名のゆえに受け入れる人は、わたしを受け入れるのです。また、だれでもわたしを受け入れる人は、わたしではなく、わたしを遣わされた方を受け入れるのです。」

ここでイエシュアは「一人の子ども」を連れて来られ、明らかにご自分とご自分を「遣わされた方」である天の父なる神とは異なる存在を指し示して語っておられます。ここまでの話の流れを考えれば、それがイスラエルの民、ユダヤ人であることは明白です。イエシュアがその子どもを「十二人」の弟子たちの端でも向かい合わせでもなく、「彼らの真ん中に立たせ」というこの行為にもそれが表されていると考えられます。そしてその子をイエシュアは「腕に抱」かれました。ここに使われている「抱く」という意味のハーヴァク(אָרַם)はなんと本来、アブラハムの子イサクの子ヤコブすなわちイスラエルを「抱いて」、客ではなく自分の家族として迎え入れるというような意味で使われた言葉なのです(創世記 29:13)。

このようにイスラエルをイエシュアの名のゆえに受け入れることは、天の父なる神を受け入れること、つまり神と結ばれる、繋がることを意味します。それはすなわちイスラエルについての神のご計画を認め、これに目を留め、信じて受け入れることを意味し、旧約聖書に記されたイスラエルに対する預言の成就、つまりイスラエルによって地上のすべての民族が祝福されるという世界の構築、完成すなわち「神の国」の到来を待ち望むことです。そしてそれはまたイエシュアをイスラエルを通して受け入れること、つまり旧約聖書に預言されたイスラエルの王として、ダビデの子と呼ばれるメシアとして捉える、理解するということでもあるのです。私たちが信じ、その来臨を待ち望んでいるイエシュアという御方は、確かにイスラエルの王なるメシアなのだということをぜひ覚えていただきたいのです。なぜならここで語られているイエシュアのこの御言葉には、逆説が伴っているからです。それはつまり「イスラエルを受け入れない者はイエシュアを受け入れない者、そして父なる神とそのご計画を受け入れない者」ということになるからです。そして何よりやがてこの地上に建てられる「神の国」とは、アブラハムとその子孫に対するこの神の約束が成就する世界だからです。

創世記【新改訳 2017】

12:3 わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う者をのろう。地のすべての部族は、あなたによって祝福される。

このように、神を受け入れ、その祝福を「神の国」を受け入れる者とならせていただきましょう。聖霊の助けがありますように。